



星巡り行き着く先は夏の果

八月十九日(土)午後八時八分頃、西北西の方角から二十二機の人工衛星が一行に連なり、北斗七星の西側を上っていききました。それは、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の風景そのもの。車窓のような光の列は一分ほど移動した後、天空に消えました。

この日は、常磐東小学校の運動場で、「岡崎星と遊ぶ会」主催の星空観察会が開かれていました。運動場には五台の天体望遠鏡が設置され、午後七時から東っ子二十人近くがご家族とともに星を観察していました。まず望遠鏡をのぞくと、まばゆいほどに輝く二日月。その表面にはクレーターがくっきりと見えましました。電子紙芝居の視聴後、さそり座の赤い星アンタレスや、ドーナツ型に見えるというリング星雲等を観察しました。会の終盤、「あれは何ですか」の一声で、一同が体育館の上空を見上げたのでした。

講師の方の「あれはスターリンク衛星です」の言葉を頼りに、帰宅後に調べてみました。スターリンク衛星とは、イーロン・マスク



氏率いる宇宙開発企業 SpaceX 社が、離島や船舶でも携帯電話の電波が届くようにと、通信網を拡充するために打ち上げている人工衛星のことでした。今年の七月頃から特に頻繁に打ち上げられており、今年度中が打ち上げのピークになる見込みとのこと。一度に二十〜六十機ほどが打ち上げられ、数日間は人工衛星が列になって進む現象が見られます。これを銀河鉄道になぞらえて「スターリンク・トレイン」と呼び、世間で注目されていることを知りました。十九日の観察会で東っ子とスターリンク・トレインを見ることのできたのは、大変幸運なことでした。

幻想的なひとときを満喫した観察会は約一時間でした。しかしその間に見かけた人工衛星の多さには驚かされました。夜空のどこかにいつも見られ、星を観察する望遠鏡の中をも通過したほどです。実際、人工衛星の輝きは、天体観測にとって光害と言われるようになりました。そこで、スターリンク衛星は黒塗りにするなど、太陽光を反射しにくくする工夫をしているそうです。

今より便利で快適な社会を築くには、新しい技術を開発し、実用化する必要があります。そして、問題点を回避する研究や自然保護の観点から、さらなる技術開発や改善が求められます。次世代を担う子供たちには、未来に希望をもち、自然を愛する気持ちと探究心をもってもらいたいと思います。学校では、考え方の多様性を受け止め、解決策を見出したり、折り合いをつけたりする寛容な態度も育んでまいります。児童の皆さんは、普段の授業や生活の中で様々なことに関心がもてるとういでしょう。そして、「不思議だな」「なぜだろう」と興味を抱いたことを、尋ねたり、調べたり、自分で考えて試したりする等、行動に移していきましよう。

